

<特別講演>21世紀の歯科医療：接着により変わる 歯冠修復

著者名(日)	真坂 信夫
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	9
号	2
ページ	131-132
発行年	1990-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007567/

〔特別講演会要旨〕

21世紀の歯科医療 —接着により変わる歯冠修復—

真坂 信夫

日本接着歯学会専務理事

歯科治療の目的は、健康な歯を維持すること、また、口腔機能を生涯に渡って保持することである。

長年に渡って齲蝕の治療を主体としてきた日本の歯科医療も、予防歯科治療の実践と歯周治療学の発達によって、さらにまた、歯科材料の開発・改善に支えられた医療技術の進歩によって、保全する歯科医療へと質的転換が進んでいる。

経済発展によってもたらされたゆとりは、健康で美しくありたいという人間本来の希求を目覚めさせ、機能と審美を満たすため、さらに質の高い歯科医療が要求されるようになってきた。成人の矯正歯科治療の増加と審美修復への強い要望にこのことが現れている。また、驚異的な平均寿命の伸びは、ますます、高齢者の口腔機能をいかに保全するかをクローズアップさせるであろう。

これらの要望にいかにかに答えるかといった問題は、結論的には、いかにして天然歯を残すかの一点に帰着される。従って、これまで以上に一本の歯を大切に作る治療技術、つまり、“歯を抜かない歯科治療”、“神経を取らない歯科治療”、“歯を削らない歯科治療”そして、“機能と審美を満たす歯科治療”が求められている。生活享受型社会の求める高価値治療の構築とその具現、受診者に理解される説得力のある歯科医療の確立が望まれている。この要求を満たすためには、高度の技術的裏付けとそれを推進するマンパワーが必要である。

治療法の質的変化の例としては、インプラン

トや接着法の導入、ポーセレンラミネートによる審美修復法の確立などが挙げられる。

特に、接着法の導入によってもたらされた質的变化は、健康な歯質の削除量を減少させることができる点にある。健全な象牙質の保存は歯髄保護に不可欠である。さらに、接着による修復材料と歯質の一体化は、歯根破折の予防に有効であり、歯冠修復物の耐久性を上げることになる。従来のリン酸亜鉛セメントを主体とした歯冠修復法によってもたらされた微少漏洩による歯髄の損傷や二次齲蝕による歯牙の崩壊、さらに支台築造歯の歯根破折といった問題をかなり減少させることができるようになってきている。接着性のなかったリン酸亜鉛セメントでは実現できなかった治療法が接着性レジンの出現により可能になった。

従来、レジンには、歯髄刺激性があると言われてきたが、私の臨床経験では、接着が確実に行われていれば、接着性レジンには、むしろ、歯髄保護に役立つ。リン酸亜鉛セメントを用いた歯冠修復法では、生活象牙質の切削面に対する創傷保護の配慮が欠けていたと思われる。

接着歯冠修復法として、次の修復法を現在、実施している。

接着歯冠修復法

- (1)接着アマルガム修復
- (2)接着コンポジットレジン修復
- (3)接着メタルアンレー修復
- (4)接着ブリッジ
- (5)接着ポーセレンラミネート 審美修復
- (6)破折歯の修復

(1)は、接着性レジンを用いることによって、保持形態のない窩洞にアマルガム充填を行う方法で、演者の発案による術式である。(3)、(4)についてはAdloyの応用が期待されている。また、極めて薄いポーセレンラミネートによる審美修復法も接着法の確立によって実現できたものである。さらに、私は、破折歯を抜歯後、それを接着し、再植し、良好な経過を示す臨床例を持っている。これも接着法の導入によって可能になったものである。

接着法の歯冠修復法への導入は、歯質の削除量を減少できる点において、保全歯科医療に確

実に寄与するとともに、時代の高価値医療の構築に貢献している。

私の診療所を訪れる新患の80%近くが再治療である。手を入れたことによって歯牙の崩壊を促進した例もある。補綴物は、何度でも再製作できるが、失われた天然歯は元には戻らない(記録：大野)。

附 記

本特別講演会は、平成2年10月26日、東日本学園大学歯学会と歯科理工学講座の共催によって開催されたものである。本講演会の内容は、本学同窓会のビデオライブラリーに収録されているので、ご希望の方は、同窓会にご連絡下さい。